

第 68 回 (2024 年度) 日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム (要旨)

マーガレット・アトウッドが描く人間、動物、環境

司会・講師 出口 菜摘 (京都府立大学)

講師 佐藤アヤ子 (明治学院大学・名誉教授)

講師 高村 峰生 (関西学院大学)

講師 矢倉 喬士 (大阪大学)

Margaret Atwood の創作活動は、小説や詩から、グラフィックノベルの原作、オンライン上の創作プラットフォームでの共同執筆まで多岐にわたる。アトウッド自身が **Speculative Fiction** と呼ぶ SF ディストピア小説、神話や古典の「語り直し」、歴史物語など、強靱な批判精神のもと生み出される作品はジャンルも幅広く、アトウッド文学の全体像を捉えることは難しい。しかし、つねに作品の根底には、「人間とはなにか」という根源的な問いと、「いかにサバイブするか」をめぐる探求がある。第 2 詩集 *Animals in That Country* (1968) では、人間と動物の境界線を問い、2016 年にはグラフィックノベル *Angel Catbird* の原作を手がけ、ネコとフクロウの DNA に融合した遺伝子工学者を生み出した。さらにポスト・アポカリプス小説〈マッドアダム〉三部作では、ポストヒューマンの世界が描かれ、「人間」という枠組みが再考された。アトウッドは評論 *Survival* (1972) で、「サバイバル」をキーワードとしてカナダ文学を論じたが、作品を重ねるごとに、人類が生き延びる可能性を探るように、思索の射程と創造の空間を広げている。

大きなスケールを有する一方、アトウッドの作品は現実の身体性やアクチュアリティを失うことがない。それは鳥瞰と虫瞰の目をあわせ持ちながら、アトウッドのまなざしが人へと向けられているからだろう。人間と非人間、人間が置かれた環境はどのように描かれているのか。本フォーラムではアトウッド文学の多面性と本質を、詩、小説、グラフィックノベルから多角的に考えたい。 (出口菜摘)

アトウッドの詩における動物たち——洪水のあとを語る言葉

アトウッドはカナダ文学評論『サバイバル』で、イギリスとアメリカ、カナダそれぞれの文学作品における動物表象を比較している。イギリス文学では、動物に「人間の性質」が付与され、アメリカ文学では「狩猟」が中心的なテーマとなり、動物を狩る人間が焦点化される。そして、カナダ文学の場合は、「動物が殺される物語」が多く、そこには政治的・文化的な「犠牲者」であったカナダが重ねられているという。同評論はアトウッドの動物表象を考えるうえで欠かせないものだが、アトウッドに特異なものではなく、60 年代から 70 年代にかけて見られた、動物物語をカナダ文学の特色とするナショナルな言説のひとつである。本発表では、アトウッド作品における動物表象を、彼女の詩学とカナダの文芸ナショナリズムが交差する場として捉え、詩集『あの国の動物たち』を中心に、「動物」になにが仮託されているのかを考える。本詩集には、のちに〈マッドアダム〉で語られる「水なし洪水」の萌芽となるような「洪水」のモチーフが描かれており、その点もあわせて論じる予定である。 (出口菜摘)

ディストピアの向こう側

M. アトウッドはディストピアには二種類あるという。一つは独裁者が国民や社会を牛耳るという不快な状況。これは『侍女の物語』で描いたもの。もう一つは、無政府状態で、全く混沌とした状況になってしまうというもの。『洪水の年』はこれにあたり。しかし、『洪水の年』では、ちょっと興味深い点があると。社会のルールは実質、無いも同然となり、生物体を取り巻く自然環境も不穏なものとなったその時代に、科学と宗教を組み合わせたものを崇め、動植物の生命保護に献身する宗教団体（神の庭師たち）が登場することである。彼らの優しさと仁愛の精神は笑いを誘うが、それと同時に希望でもある。物語が進むにつれて、ディストピア社会のなかに、ディストピアとユートピアが含まれていることが分かってくる。従来型の出口のないディストピア小説とは違い、〈希望に向かう出口〉を示す（新ディストピア小説）をアトウッドは目指すのか。「マッドアダムの物語」三部作を中心にその辺の事情を探りたい。（佐藤アヤ子）

『マッドアダム』における石油と宗教共同体

2009年に *Die Zeit* に掲載された文章（および2015年にそれを振り返ったウェブ記事）において、マーガレット・アトウッドは環境破壊が世界にもたらす三つのシナリオを描き出している。このうち最も悲観的なシナリオでは、石油資源の枯渇が都市生活に深刻な影響をもたらす、物資の輸送や人の移動が滞り、町から光が消え、略奪が行われる。人々は自分たちが「石油に依存しているだけでなく、石油によって作られている」ことを認識し、石油のない世界では人間の活動範囲は驚異的な速さで小さくなることを思い知る。

本発表では、上の記事と同時期に執筆されたディストピア、〈マッドアダム〉三部作のうち第三作『マッドアダム』（2013）に焦点を当て、そこに描かれた「石油教会」の指導者レヴと、それに反逆して宗教的エコロジー運動を主導する異母兄弟ゼブとアダムの関係性を考察する。石油とエコロジー運動の対立、環境問題の「解決」へのアトウッドの両義的な見方、絶滅以後の共同体の可能性、およびそこにおいて「物語」の担う役割について議論したい。（高村峰生）

ここでは自爆テロは起こらない

——マーガレット・アトウッドの『エンジェル・キャットバード』における カナダ的例外主義と準-当事者性について

アトウッドは、1972年にカナダの文学性を論じる『サバイバル』を出版するなど、キャリア初期から文学におけるカナダらしさに関心を持ち続けてきた作家である。ここに、同じくカナダ出身の批評家であるリンダ・ハッチオンが論じたカナダ的性質、すなわち、「アメリカの準-周縁としてのカナダ」という論点を併せて考えることで、アトウッド作品におけるカナダの位置づけはより一層明確になる。『侍女の物語』とその続編である『誓願』において、カナダはアメリカほど酷くはない場所として描かれており、さらに媒体を変えて実験性と先鋭性を増したグラフィックノベル『エンジェル・キャットバード』においては、欧米諸国とのつながりを保ちつつも自爆テロが起こらない準-周縁の場所としてのカナダ文学の可能性が示唆されている。本発表では、世界に対してトップクラスの影響力を持たない代わりに、世界的問題に対する差し迫った当事者性から解放されてもいるカナダ的例外主義についての考察を行う。（矢倉喬士）